FUKUI PREFECTURAL MUSEUM NEWS

ふくいミュージアム

2020.9.25 No.62

令和２年度秋季特別展

明治から平成 皇室とふくい ―行幸・行啓の記録と記憶―

平成28年の夏、天皇陛下（現 上皇陛下）から生前退位についての「おことば」発表があり、その後、明治以降で初めてとなる生前退位と今上陛下の御即位、そして、平成から令和への改元という大きな動きがありました。こうした一連の社会状況の中で、私たちにとって、天皇や皇室というのはどのような存在であるのかといった議論が盛んになされました。

天皇や皇太子の地方へのお出ましは、天皇や皇室と国民とのつながりを考える上で、一つの大きな出来事です。天皇がお出かけになることを「行幸」、皇太子や皇后などがお出かけになることを「行啓」と言います。

行幸や行啓に際しては、地場産品の献上や天覧が行われました。また、功績のあった郷土の人物がお目見えしました。行幸や行啓は、福井の人が地域を捉え直し、アピールする機会でした。

また、行幸や行啓を機に、それを記念した記録集や感想録が出版されたり、石碑が建てられたりして、行幸・行啓の記憶が人々に共有されていきました。

この特別展では、福井への近代以降の行幸や行啓に関連する資料を展示することで、福井に住む人々と天皇や皇室との交流の歴史を振り返ります。

なお、「明治天皇」や「昭和天皇」といった呼称は本来生前には用いられないものですが、本稿及び展示においては混乱を避けるため生前の出来事であっても「明治天皇」、「大正天皇」、「昭和天皇」の語を用います。

１.明治天皇の北陸巡幸

江戸時代の天皇は御所から外出することはほとんどありませんでした。写真やテレビのない時代の地方の住民にとって、天皇は見えない存在でした。

明治維新後の近代化の中で、天皇を新たな君主として国民の前に示すこと、そして天皇自身が国民や国土を知ることを目的として「六大巡幸」と呼ばれる日本各地への行幸が始まります。

当時、石川県と滋賀県に分轄されていた福井に明治天皇の行幸があったのは、明治11年（1878）に行われた「北陸東海巡幸」の途上のことです。この年の８月に東京を出発した天皇は、10月１日には金沢に到着し、６日に牛ノ谷から越前へと入りました。その後、４日かけて越前を縦断し、10日に柳ケ瀬から木ノ本へと抜けました。

この道すがら、天皇が休憩した「御小休所（おこやすみしょ）」や滞在した「行在所（あんざいしょ）」には、明治天皇やお付きの人々から多くの品物が下賜されました。明治天皇の越前滞在はわずか５日間のことでしたが、県内ではこの行幸を記念した石碑の建立や下賜された物品の保存などが行われました。昭和の頃になると、そうした明治天皇の足跡を調査し、顕彰しようという動きが起こります。県内に残る明治天皇ゆかりの地を調査し、石碑や下賜品などについてまとめた『明治天皇北陸御巡幸福井県誌』が刊行されたり、明治天皇ゆかりの地が、昭和10年（1935）前後に史蹟に指定されたりしました。

ここでは、北陸東海巡幸の際の資料や、昭和になってからの明治天皇の行幸をふり返ろうとする動きについての資料を展示します。

「北陸東海御巡幸早見表」の明治天皇行列

2.皇太子時代の大正天皇の北陸行啓

明治天皇による大規模な地方行幸は、明治18年に行われた「山陽道巡幸」を最後に行われなくなりました。憲法発布等を経て、政治体制や国内情勢が落ち着いたこともあって、大規模な行幸を行わなくなった明治天皇に代わって各地を訪れたのが、後に大正天皇となる嘉仁(よしひと)皇太子です。

嘉仁皇太子が福井県を訪れたのは、明治42年(1909)のことでした。9月15日に東京を発った嘉仁皇太子は、岐阜を経由して、18日に武生、福井へと到着し、23日まで滞在しました。

嘉仁皇太子の行啓に際しては、その様子がグラフ誌で報じられました。またそれだけではなく、行啓を記念して多くの写真帖が刊行されました。今回展示するこれらの写真帖の刊行によって、地域や郷土の名士が視覚化されていきます。また、行啓を記念して、足羽山公園の整備も進みました。

大正13年(1924)には、後の昭和天皇で、当時摂政となっていた裕仁(ひろひと)皇太子による行啓もありました。

3.昭和天皇の福井行幸

昭和8年(1933)10月には、大規模な軍事演習である「陸軍特別大演習」が坂井郡で行われました。昭和天皇は、陸軍と海軍を率いる「大元帥(だいげんすい)」としてこの演習に参加するため、福井県を訪れました。また、演習の終了後には、天皇として県内各地を視察しました。

この時、福井県や福井市は、地域の物産を天覧品や献上品とすることによって、天皇や随従の人々に対してアピールしました。また、児童や生徒による成績品の天覧なども行われ、習字作品などが県下から出品されました。

こうした中で特筆すべきものが、生物学に造詣の深かった昭和天皇の来県を記念して行われた、県下の小中学校の生徒・児童による博物採集と標本作成です。この採集によって、県内の植物、昆虫、貝類の合わせて1万7000種あまりが採集されて天覧に供され、一部の標本は献上されることとなりました。この採集活動は初の県下全域にわたる植物標本の作成であったともされていますが、その標本の多くは空襲などによって焼失しました。今回の展示では、奇跡的に焼失を免れた当時の植物標本を展示します。

大本営行在所記念碑

この行幸にあたっては、福井県の『昭和八年陸軍特別大演習并地方行幸福井県記録』や福井市の『昭和八年陸軍特別大演習并地方行幸福井市記録』をはじめとした数々の記録、感想録、記念出版物が発行されました。また、演習や視察の拠点となった福井県庁には「大本営行在所記念碑」が建立されるなど、行幸の記憶を後の世に伝えようとする動きがありました。

戦前に「国の元首にして統治権を総攬」する存在であった昭和天皇は、敗戦によって新たに「日本国の象徴であり日本国民統合の象徴」とされました。昭和21年から昭和29年にかけて、昭和天皇は全国各地に行幸します。

福井県に行幸があったのは、昭和22年のことでした。この年10月23日に東京を発った天皇は、10時間かけて敦賀に到着しました。この時の行幸では、敦賀、小浜、武生、鯖江、福井、大野、勝山、芦原、丸岡などを訪れ、26日まで県内に滞在しました。

福井県が発行した『昭和二十二年 福井県巡幸誌』には、戦死者の遺族や引揚者などに親しく声をかける昭和天皇の姿とそれに感激する人々の姿が伝えられています。

4.昭和後期・平成の行幸・行啓

その後、昭和37年の全国植樹祭、昭和43年の福井国体に際して、昭和天皇による本県への行幸がありました。

上皇陛下も皇太子時代に昭和43年の福井国体をはじめとして、昭和55年の全国育樹祭、同61年の豊かな海づくり大会に行啓されました。御即位後も、平成4年(1992)、21年、30年に行幸がありました。県が発行した記念誌等を中心として、こうした昭和後期の行幸・行啓についても、当時を振り返ります。

(橋本紘希)

館蔵資料紹介

写真絵葉書「武生座」

［法　量］縦14.3×横9.0(㎝)
［時　代］明治43年（1910）

福井県武生市（現 越前市）幸町にあった劇場「武生座」の写真絵葉書です（画像１）。「南越武生／観光紀念」のスタンプが押され、「越前武生‥(劇場）武生座［禁複製］増永商店発行／THE TAKEFU-ZA THEATRE, TAKEFU」、表面に「UNION POSTALE UNIVERSELLE CARTE POSTALE」「郵便はかき」の印刷があります。

写真は武生座の正面で、手前の人々との比較から天井の高い建物であることがわかります。向かって左には「木戸場代共」として、「一等五拾銭、二等卅五銭　三等二拾銭　十才以下小児半額　引ニ下足料　三銭」などの貼り紙が見えます。ちなみに、国家公務員（高等文官）の初任給が55円、銀行員が40円、巡査が13円の時代(※)です。

興味深いのは興行内容です。画面手前や劇場正面に数多く掲げられている旗には、「松旭斎天二師丈江」「天二師」という文字が見えます。また、数は少ないものの、「天一師」「天勝嬢」の旗もあります。向かって右の軒下には西洋風のポスターが貼られており、これは明治43年の松旭斎天一一座による新富座（東京都）の興行ポスターの絵柄と一致します（画像２）。これらから、福井出身で、明治時代を代表する奇術師、松旭斎天一一座の明治43年の武生興行とわかります。

松旭斎天一は、嘉永６年（1853)、福井藩家老・狛家に仕える牧野家に生まれました。幼少期に徳島で出家し、15歳で寺を追われ、旅芸人の一座で手品を身に着けたとされます。明治21年（1888)、35歳のとき東京でロングラン公演に出演し大成功を納め、25年には明治天皇・皇后の天覧を得ました。明治34年にいったん一座を解散し、少数の弟子やスタッフとともに渡米、欧州へと巡りました。

同行者の一人が天二です。明治14年に徳島県で生まれ、翌年、天一の養子になり、長じて奇術を学び、天一の後継者と目されて一座で活躍するようになりました。天一らの帰国後も欧州に残って西洋の奇術を習得し、明治42年に帰国します。そして、天一一座は明治43年の元旦の新富座興行を皮切りに、日本各地を巡業します。福井県内では、武生座（９月９日～９月13日）のほか、加賀座、昇平座（福井市)、三国、敦賀でも公演を行いました。

この写真絵葉書からは、天一一座が、地方巡業にも新富座公演のポスターを使っていたこと、武生座の興行で座長の天一ではなく天二を前面に出したことが見てとれます。後者の理由は、天一が武生座での興行の直前に東京へ帰っており不在であったこと（８月に東京で発生した水害の後始末のため帰京）です。加えて、この当時、天一が天二への代替わりを考えていたとされることも重要です。一座の女性奇術師・天勝の人気が高まってもいたものの、本資料に見える興行の情景からは、天二を天一の代役にとどまらず、一座の二代目として印象付け、さらには円滑な代替わりへと繋げる意図もうかがえるのではないでしょうか。(瓜生由起)

西洋風の大判カラーポスター
(縦104×横74cm)に
見入る人々。

画像１

画像２　松旭斎天一一座 東京新富座興行ポスター（明治43年）
河合勝マジックコレクション
画像提供:福井県立こども歴史文化館

(※)『値段史年表　明治・大正・昭和』 週刊朝日編　1978　朝日新聞社

館蔵資料紹介

橘家文書のうち 滝川一益・羽柴秀吉・明智光秀連署状

［法　量］縦27.5×横43.0(㎝)
［時　代］天正元年（1573）

橘家は戦国時代以来、越前北庄に住み、薬商人・医者を営み、朝倉義景・織田信長・結城秀康などの越前の権力者から家業を安堵されていました。

今回は、その橘家に伝来した文書の中から、橘家と明智光秀の関係を示す資料を紹介します。

下記の写真は滝川一益・羽柴秀吉・明智光秀連署状です。信長の家臣である３人から橘家へ宛てた文書となります。年代は天正元年（1573）９月５日です。

天正元年８月、信長は朝倉氏を滅ぼし、越前へ入りました。一益・秀吉・光秀の３人は北庄へ入り、信長の代理として戦後処理に当たりました。

本資料では、「橘家の身の上のことについては、御朱印の内容に従って、諸役（雑税）などは以前と同様（免除）であると心得なさい」と、橘家に対する雑税などを免除しています。「御朱印」とは、これまた橘家文書中の天正元年８月25日付の織田信長朱印状を指し、信長が橘家の特権を認めたものです。つまり、３人は信長の意向に沿って、橘家の特権を認めた文書を発給したわけです。

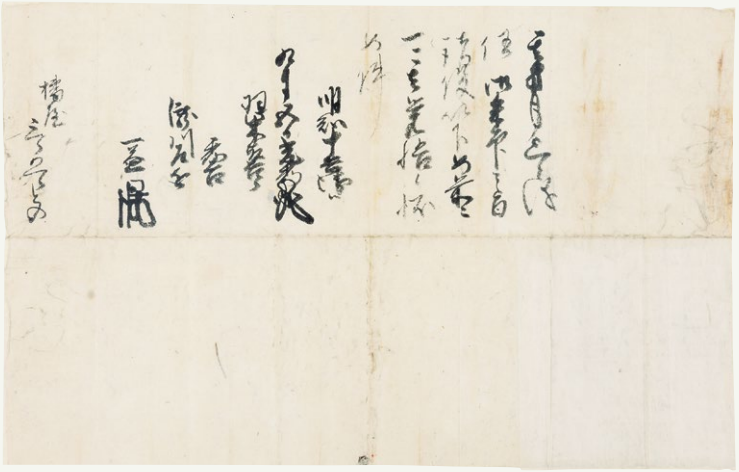
この３人は、橘家のほか、丹生郡の劔神社、大野郡の宝慶寺、坂井郡の瀧谷寺などにも知行を認めた文書を発給しました。彼らは、朝倉氏滅亡直後の不安定な政治情勢の中で、信長の代わりに越前の住人や寺社に対して文書を発給し、統治を進めるという重要な役割を果たしており、信長から高く評価されていたことがうかがえます。

ここで光秀と越前の関係についていえば、近年、光秀が美濃から越前へ落ち延びて義景に仕えたことが注目されていますが、これに関する確実な資料は少なく、不明瞭な部分が多いのは否めません。一方、光秀が信長に仕えてからは、元亀３年（1570）の越前金ケ崎の合戦で殿（しんがり）を務めたことや、天正元年の朝倉氏攻めに帯同して戦後処理に当たったこと、天正３年の越前一向一揆攻めに参加したことなどが知られています。とりわけ、本資料は光秀自身が越前で発給した文書で、光秀と越前の関係を示す確実な資料として重要です。光秀は旧主である朝倉氏が滅んだのちに越前の統治に関わり、何を想ったのでしょうか。大変気になるところです。

光秀はその後、９月中には越前から出て、居城である近江の坂本城へ戻り、信長の重臣である村井貞勝とともに京都代官を務めるようになります。坂本城主、京都代官、戦場での指揮や戦後処理など、多くの役割を務め、出世していくことになります。

ちなみに、本資料には、秀吉の署名はありますが、花押がありません。これはなぜでしょうか。秀吉は朝倉氏攻めに帯同し、当初は戦後処理に当たる予定でしたが、信長とともに浅井氏攻めのために近江へ出陣し、越前にいなかったからだと考えられます。秀吉は浅井氏滅亡後、小谷城に入り、間もなく長浜城主となります。彼もまた光秀とは別の道筋で出世していくことになります。

（大河内勇介）



其方身上之儀、
任　御朱印之旨、
諸役以下如前々
可其覚悟候状、
如件、
明知（智）十兵衛尉
（天正元年）九月五日　光秀（花押）
羽柴藤吉郎
秀吉
滝川左近
一益（花押）

橘屋
三郎五郎との

研究ノート

福井県立歴史博物館蔵「短冊手鑑」について（1）～形状と由緒～

［法　量］縦26.8×横20.1×高さ4.3(㎝)
［年　代］万治元年（1658）

福井県立歴史博物館が平成13年度に購入した「短冊手鑑」は、江戸時代初期に後水尾法皇が製作し、皇后の東福門院から徳川家、そして若狭小浜藩主の酒井忠勝へと贈られ、長らく酒井家に伝来してきた品です。

「短冊手鑑」の「短冊」とは、和歌等が書かれた厚い縦長の料紙のこと、「手鑑」とは複数の漢詩や和歌、古い経典などの断片を一つの折本装の台紙に貼り付けてまとめた冊子のことをいいます。

今日、日本に伝世する手鑑で著名なものの多くは、製作された年代よりも前の時代の人々が記した紙片、いわゆる古筆切が貼り付けられている品ですが、この「短冊手鑑」は、後水尾法皇が製作と装丁に至るまで一貫してプロデュースし、同時期に同一工房で作成した規格化された短冊60枚をまとめたものであることに他と異なる大きな特徴があります。

そして、それは製作意図と伝来にもかかわることなので、次節で詳しくみていきたいと思います。

「短冊手鑑」の形状

この手鑑に関係する人々については後に述べることとして、まずは形状について観察してみることにしましょう。

透き漆を何度も塗って光沢を出した溜塗の箱の中に、紫の絹地に包まれた手鑑と「御短冊筆者之目録」と題された横帳が納められています。箱蓋には、朱色で「酒井家印」の印が捺された小さな紙片が貼られています。また、小さな木札が付属していて、「短冊小手鑑」、「女院より御拝領」と記されています。「女院」とは東福門院のことです。

本体の手鑑には、江戸時代初期の最高技術による華麗な装飾が施されています。

表紙・裏表紙は、全体的に金糸が剥落して茶色の下地が目立っていますが、夕顔の花と葉と蔓、右向きの龍と瓢箪の意匠の金襴で彩られています。四隅は「波に水車」をデザインとした銀金具が嵌められています。波は筋彫り、水車の軸受部分は魚子と呼ばれる彫金技術で表現されていて、その技術の高さは、わずか４㎜の間に10点の魚子が打たれるほどの繊細で優美な作りです。夕顔、龍、水車の取り合わせも意図的なものがあるようです。三つに共通して連想されるのは、「水」、王朝を舞台とした「源氏物語」といったところで、龍は「王」でしょうか。

表紙と裏表紙のそれぞれの見返しは、淡彩の「楼閣山水図」です。作者は、後水尾法皇と東福門院が重用した狩野探幽か狩野信政ではないかと考えられます。私は探幽ではないかと推定して調査を続けていますが、いずれにしても当時の狩野派を代表する絵師による漢画で、小品ながらのびやかで静かな情景は、絢爛な表紙と次から始まる金泥絵の和歌短冊の世界とをつなぐ大きな役割を果たしています。

また、表紙見返しの糊付けが剥がれかけており、そこに「万治元年霜十八日上ル　院御経師」と墨書があることをみてとれます。本来ならば見ることができない部分にこのように記したのは、後の修理の際にいつ誰がこの装丁に関わったのかを参照することができるようにするためでしょう。「院御経師」とだけあって実名はありませんが、後水尾法皇お抱えの表装技師が関与していることは明らかで、この手鑑の伝来を物語っています。

さて、手鑑の本編ともいえる短冊が貼り付けられた台紙は20葉あり、一葉に三つの短冊が貼られています。短冊は縦21.8㎝、横3.9㎝と小ぶりの料紙で、上端より３㎝から５㎝の幅に青い線による打曇がかかり、料紙全体に草花、樹木、橋、網、鳥居などの風景が極細い筆で金泥によって描かれています。これらは大きさは統一規格ですが、金泥絵はひとつとして同じものがありません。17世紀初めの京の有力町衆でもあった「絵屋」の技術による料紙装飾の作例ともいえ、余白の美を考えた構図で描かれているところに法皇の好みとこの時期特有の美意識を感じさせます。

さて、短冊には、金泥絵の上に一人一首の詠歌が各々自筆で記されています。それぞれの筆の運び、金泥の上から書かれる字の墨が弾かれる風情には艶やか

さがあります。

和歌は、いずれも情景や心情が巧みに詠み込まれた作です。この手鑑自体が、古今伝授を相承した法皇の声がかりによって詠むことを許された当時一流の公卿たちの歌集でもあり、江戸時代の文学上でも貴重な資料ともいえるものです。

詠人60名は、短冊署名順に好仁、智忠、幸家、信守、康道、道房、良純、尊覚、道晃、最胤、尊純、實秀、定好、公益、通村、経敦、雅宣、共房、實有、季継、兼賢、嗣良、基音、俊完、公理、通純、共綱、弘資、頼業、資行、資慶、雅昭、定逸、氏成、元親、兼俊、綵光、為賢、時庸、為尚、基定、宗種、具起、永将、嗣孝、圓宣、時直、高有、有純、隆術、信孝、雅陳、秀相、尭圓、重秀、公久、尭通、隆脩、定時、為景です。最初の歌は、後陽成天皇の皇子の好仁親王の作で「朝忍恋　いかにしてまくらもしらん朝ねかみ　みたれて下におもふこころは」です。それに続く歌については、別号でご紹介できればと思っています。

以上、手鑑の特徴を述べてきました。図１から図６に一部の画像を掲載しました。これを実際に手に取れば、小さいながら完結した独特の鑑賞の世界をもつ作品であることに気が付かれると思います。金襴と銀金具で飾られた華々しい表紙を開くと、まずは狩野派による静かなる漢画の風景で威儀を正される思いがし、金泥絵、優美な字、和歌が作り出す世界に引き込まれるような心持ちがします。

「短冊手鑑」をめぐる人々と由緒

次に、この「短冊手鑑」のたどってきた歴史について深く関係した人物三人、後水尾法皇、東福門院、酒井忠勝について述べたいと思います。

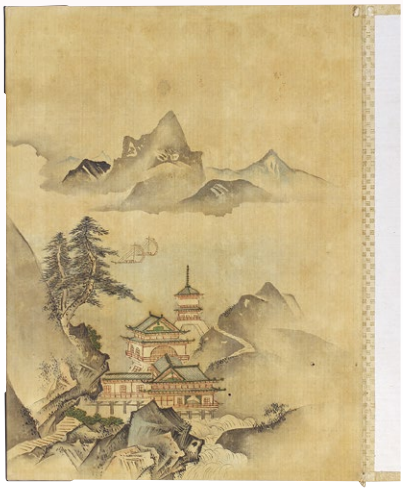
後水尾法皇が生きた慶長元年(1596)から延宝八年(1680)の時代は、天下人が覇を競い、豊臣秀吉に次いで徳川家康が台頭し、その後の平和で安泰な世の礎を築いた時期、いわば日本の大きな変革期でした。

後水尾法皇は、生涯において、度々、徳川家の介入を受けました。父である後陽成天皇の譲位を受けて天皇に即位する過程でも徳川家の意向に左右され、在位中の慶長20年(1615)には幕府から「禁中並公家諸法度」が出され、天皇や公家たちが政治から遠ざけられることとなりました。また、将軍の徳川秀忠と正室「江」の五女である和子(東福門院)が元和７年(1621)に入内した際にも、徳川家による干渉を受けました。その後、二条城行幸などでやや緩和した朝幕関係も、寛永４年(1627)の「紫衣事件」と一連の顛末によって破綻し、ついに寛永６年に、後水尾天皇は幕府への事前通告なしに第一皇女の明正天皇への譲位を決行しました。譲位後は法皇として、一層、和歌などの文芸・学問の道を究め、後進の指導にあたったため、法皇の周囲では「寛永文化」と称される皇室と京の上流町衆の文化が形成されるに至りました。

後水尾法皇の皇后の東福門院は、幕府、特に徳川秀忠との間で複雑な関係にあった後水尾法皇を支えた女性です。法皇より11歳下ですが、夫と父、朝廷と幕府の間に立ち、後水尾天皇譲位後は、国母として法皇とともに、明正天皇、後光明天皇、後西院天皇、霊元天皇と四代にわたる天皇と皇室、皇族たちを助けました。法皇の最も近くにいた、一番の理解者であったといえます。

短冊手鑑を拝領した酒井忠勝は、三代将軍徳川家

6　裏表紙



5　裏見返しの漢画

4　短冊(第20葉)

光、四代家綱に仕えて幕閣の中枢にいた人物で、若狭小浜藩の藩主でした。東福門院の身内である越前松平家も東福門院へ様々な贈り物をしましたが、酒井忠勝も東福門院へ若狭の海産物や特産の筆や硯石を贈り、親しい関係であったことが酒井家への東福門院女房奉書(小浜市教育委員会・酒井家文庫所蔵)からもうかがえます。

後水尾法皇、東福門院を頂点とする朝廷と幕府側の酒井忠勝の関係として特に注目されるのは、法皇が幕府側の忠勝に信頼を寄せていたことです。

承応３年(1654)に、心が塞ぎがちの法皇が自由な洛北への行幸を願って認めた書状が、忠勝に充てられたものであること(「後水尾院筆覚書」、京都国立博物館所蔵)は、それを裏付けるものとして知られています。それより以前、後水尾天皇が突然の譲位をしたという一報を受けた忠勝が、事態を荒立てずに穏便に対処するように江戸から指示を出したことも、法皇と忠勝との両者の信頼関係があってのことでしょう。

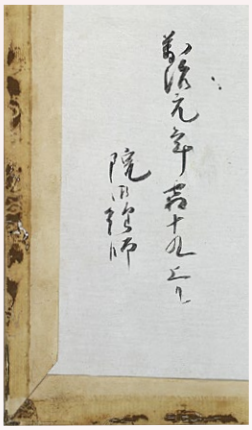
では、どうして、この手鑑が忠勝の手元に渡り、小浜酒井家へ伝来したのでしょうか。

酒井家の記録によると、寛文２年(1662)に四代将軍家綱が、病に伏した忠勝を慰めるために贈った品々の中に「東福門院所賜御製作十歌仙手鑑及公卿各筆短冊之帖」(「忠勝公年譜」、小浜市教育委員会・酒井家文庫所蔵)があります。

忠勝はその年に亡くなりますが、忠勝にすれば、なによりのお見舞の品であったのではないかと思います。徳川泰平の世が完成する前後、時代の変革期ともいえる中で、長きに渡り朝幕関係の中でともに苦節を越えてきた尊い方々、直接に顔を合わすことはなくとも互いに信を置いていた方が作り上げた最上の品を、次世代を担う徳川家の若い主君から拝領したのですから、思い入れも深かったのではないでしょうか。

それゆえ、この手鑑は、その後も長く酒井家の元で大切にされました。天保５年(1834)に作成された「御譲道具入日記」には、この手鑑が「一、表紙茶地金入唐草龍ノ丸隅金物銀ノ水車裏絹山水ノ絵、一、溜塗箱入、一、短冊筆者目録有」と記録されており、この作品と特徴が一致することから代々藩主に大切に伝えられた品に間違いないことがわかります。

寛文文化の粋を凝縮したこの短冊手鑑の存在は、展示にも数度しか出陳されたことがなく、まだあまり知られていませんが、その伝来の背景とともにより価値が評価されるべきだと思います。　　(有馬香織)


見返し裏

表紙の銀金具

参考文献

熊倉功夫『後水尾院』(朝日評伝選26、朝日新聞社、1982年)
日本文化の会編『東福門院 寛永文化創造の後楯』(平凡社、1988年)
久保貴子『後水尾天皇 千年の坂も踏みわけて』(ミネルヴァ書房、2008年)
『天皇の美術史4 花開く宮廷絵画 江戸時代前期』(吉川弘文館、2017年)

3　短冊(第１葉)

2　表見返しの漢画

1　短冊手鑑　表紙

博物館日誌（令和2年4月～令和2年8月）

4月

- 2月27日㈭～5月26日㈫
  写真展「1964・東京五輪への道」
  （エントランスギャラリー）
- 2日㈭
  福井市立郷土歴史博物館来館（資料調査）
- 4日㈯～5月10日㈰
  新型コロナウィルス感染拡大防止のため、臨時休館。
- 7日㈫～10日㈮
  資料燻蒸（殺菌殺虫室）
- 14日㈫
  越前市公会堂記念館来館（資料調査）
- 23日㈭
  福井県立一乗谷朝倉氏遺跡資料館来館（資料返却）
- 25日㈯
  企画展「1964・東京五輪とそのころの福井」開催延期

5月

- 11日㈪
  開館
- 18日㈪～6月23日㈫
  企画展「絵で楽しむ　大正・昭和ロマンの旅
  ～鳥瞰図でめぐる日本の観光地～」（特別展示室）
- 27日㈬～6月2日㈫
  燻蒸のため休館

6月

- 2日㈫
  「昭和のくらし」コーナー夏の模様替え（トピックゾーン）
- 3日㈬～7月31日㈮
  写真展「昭和20年7月19日～福井空襲～」
  （エントランスギャラリー）

7月

- 7日㈫
  「昭和のくらし」コーナー季節展示替
  （トピックゾーン）
- 10日㈮～12日㈰
  資料燻蒸（殺菌殺虫室）
- 18日㈯～8月31日㈪
  特別展「天下人の時代―信長・秀吉・家康と越前―」
  （特別展示室）
  特別陳列「寄贈された復興観音像―復興慈母観音番外9番
  旧医王観音―」（オープン収蔵庫）
- 19日㈰
  ふくい歴博講座「明智光秀と越前朝倉家の薬・生蘇散」
  （福井県立一乗谷朝倉氏遺跡資料館学芸員　石川美咲氏）
  （講堂）
- 20日㈪
  特別展「天下人の時代―信長・秀吉・家康と越前―」
  展示替え
- 25日㈯
  フレンドリーアート号

8月

- 1日㈯～10月20日㈫
  パネル展「姉川合戦図屏風の武将たち」
  （エントランスギャラリー）
- 8日㈯
  特別展「天下人の時代―信長・秀吉・家康と越前―」
  展示替え
  特別講演会「明智光秀―天下人への道」
  （関西学院大学教授　早島大祐氏）（講堂）
- 20日㈭～25日㈫
  博物館実習
- 22日㈯
  ふくい歴博講座
  「新出資料：本能寺の変直後の柴田勝家書状を読む」（講堂）

令和２年度特別展「天下人の時代―信長・秀吉・家康と越前―」
（7月18日～8月31日）

秋季特別展

明治から平成 皇室とふくい
― 行幸・行啓の記録と記憶 ―

開催期間：令和2年10月24日㈯～11月29日㈰
休館日：11月11日㈬

観 覧 料：一般400円　大学・高校生300円
小中学生・70歳以上の方200円
※20名以上の団体は2割引

※会期・内容は、予告なく変更される場合があります。
公式サイトなどで最新の情報をご確認の上、ご来館ください
ますようお願い申し上げます。

［編集・発行］
福井県立歴史博物館
〒910-0016 福井市大宮 2-19-15　TEL.0776-22-4675㈹
https://www.pref.fukui.jp/muse/Cul-Hist/

ふくいミュージアム
No.62　令和2年9月25日発行